

身延山晩年の日蓮聖人

— 弘安四年九月から十一月まで —

上 田 本 昌

一、弘安四年の秋（九月）

六十歳の秋を西谷で静かに迎えた日蓮聖人は、身延山をこの上なく愛し、尊い靈山であると受けとめ、この頃には、弟子や檀越に対しても、法華経の根本道場であることを、強調されるに至っていた。

すでに慢性化した病状も、一進一退のうちに夏を越し、涼風のなかでやや健康をとりもどすようにも見受けられた。そうした九月十一日に南条兵衛七郎から、塩一駄・大豆一俵・鶏冠菜一袋・酒一筒等の食糧品が送られてきた。その折りの御礼状が記されている。真蹟は伝わっていないが、日朝の写本が遺されている。それによると、「上野国より御掃宅候後未_レ入_レ見参_一候、牀敷_一存候し処に品々の物ども取副_一候て御音信に預_一候事申_レ尽_レ難_レき御志にて候_一」とあるので、この頃はしばらく南条家との交信がたえていた事がわかる。

ところで、南条兵衛七郎という人物であるが、この人は時光や七郎五郎の父に当る。聖人とは鎌倉で知り合いになり、入信して一家をあげ篤い信仰を持った。南条新左衛門頼員の弟で、妻は松野六郎の女であるという⁽²⁾。しかし、文永二年頃に臨終正念で歿したと伝えられているので、ここでいう南条兵衛七郎というのは、七郎次郎時光のことを指

身延山晩年の日蓮聖人（上田）

しているものと考えられる。

「釈迦仏は、我を無量の珍宝を以て億劫の間供養せんよりは、末代の法華經の行者を一日なりとも供養せん功德は、百千万億倍過ぐべしとこそ説^レせ給^レて候に、法華經の行者を心に入れて数年供養し給^レ事、難^レ有^レ御志哉。如^レ三^レ金言^一者、定^レて後生は靈山浄土に生^レれ給^レべし。いみじき果報哉。」⁽⁴⁾

と外護の檀越に対する功德の甚多たることを明らかにしている。「定^レて後生は靈山浄土に生^レれ給^レべし」という表現からすると、いかにも靈山浄土は、後生でなければ到達することのできない処のように考えられるが、聖人のいう靈山浄土は、必ずしも死後の来世でなければ到達することのできない場所を意味するものではない。もちろん後生においても生まれることのできる浄土ではあるが、後生に限定されているわけではない。それは、右の文のすぐあとに、身延山のことを指して、

「此処は人倫を離れたる山中也。東西南北を去^レて里もなし。かかるいと心細き幽窟なれども、教主釈尊の一大事の秘法を靈鷲山にして相伝し、日蓮が肉団の胸中に秘して隠し持てり。されば日蓮が胸の間は諸仏入定の処也。

舌の上は転法輪の所、喉は誕生の処、口中は正覺の砌なるべし。かかる不思議なる法華經の行者の住処なれば、いかでか靈山浄土に劣るべき。法妙なるが故に人貴し。人貴きが故に所尊^レと申^スは是也。」⁽⁵⁾

と述べている。即ち、一応は後生に靈山浄土へ生まれることができるとして、対機説法の形をとっているが、そのすぐあとで、法華經行者の住処をもって、靈山浄土に劣らぬ処であるとし、現世においての靈山浄土を示し、神力品において明らかなように、たとえ林中・樹下・僧坊いずれの処にあっても、即是道場であり、法華經行者の住処はいずこにあっても、直に靈山浄土たりうることを明らかにしているといえる。なかでも身延山をもって、最も勝れた処で

あると理解し、「此砌に望まん輩は無始の罪障忽に消滅し、三業の悪転じて三徳を成ぜん（乃至）彼月支の靈鷲山は本朝此身延の嶺也。」と言明されるに至っている。

即ち、聖人の身延靈山説は、晩年に至って次第に確定的となり、身延山は靈鷲山に似ているという中期の表現から、さらに一步を進めて、「身延即靈山」という考え方に進展して来ているのである。その一つの現れが、この御書の中にも見ることができるといえよう。「彼中天竺の無熱池に臨し惱者が、除_レ愈_レ心中熱氣_ニ充満其願如清涼池とうそぶきしも、彼此異なりといへども、其意は争か替るべき」と述べて、身延山を中印度の無熱池に譬え、この地に足を運ぶ者は、罪障消滅し転悪成徳の利益を得ることができるとしている。したがって最後に「參詣遙に中絶せり。急々に可_レ企_三來臨_一。是にて待_レ入候_{ベシ}。」と記し、日本の無熱池たる身延山への參詣を勧奨しているのである。これは身延山をもって、端に靈山淨土に擬したというだけでなく、日本の靈山淨土たる身延山へ參詣することにより、無始の罪障が消滅され、妙法五字の光明に照らされ、三業の悪が三徳と転じ、現身に仏を得ることができるところに、最も大きな聖人の意図があったということができよう。さらに一步を進めてみるならば、仏在世の靈山淨土は、印度の靈鷲山であり、滅後末法の靈山淨土は「法華經の行者の住処」ということになり、その最も代表的な具体的場所は、「本朝此身延の嶺」ということになるであらう。

聖人が身延へ入山の当初は、「結句は一人になって日本国に流浪すべき身」と述べながらも、九年間一度も山を離れて山外に出ることなく、あえて身延山に住居を定められたことは、やはりこうした考えが、その根底にあったからではなかったかといえるのである。少なくとも身延山を「心中に叶った山として入山当初から、九年後に下山するまで一貫して持ち続け、年と共にその度合いを深め、ついに靈山淨土として高められていったことには、間違いのない

ものがあつたといえよう。⁽⁷⁾

九月にはもう一度、二十日に御供養の品々が上野殿から届けられた。「いゝものいゝ駄・こぼう一つと・大根六本」⁽⁸⁾といった食糧品である。「いもは石のごとし。こぼうは大牛の角のごとし。大根は大仏堂の大ききのごとし。あぢわひは切利天の甘露のごとし。」と形容している点からみても、当時としては貴重な食糧であり、病身を支える上で、大切な栄養源として用いられたものと考えられる。「千金の金をもてる者うえてし(餓死)ぬ。一飯をつと(苞)につつめる者にこれ劣れり。経云うえたる世にはよね(米)たつとすと云云。一切の事は国により、時による事也。仏法は此道理をわきまうべきにて候。」⁽⁹⁾と語っている。

聖人在世当時は、すでに『立正安国論』で述べられているように、いつも飢饉が襲い、人々の食生活は、想像を絶する貧しさであつたようである。「牛馬斃^レ巷骸骨充^レ路、招^レ死之輩既超^三大半^一、不^レ悲^レ之族敢無^三二人^二」⁽¹⁰⁾という現実の中にあつて、しかも山中の交通不便な草庵で、病身を癒すことは、安易なことではなかつたであろう。当時は聖人だけではなく、一般の食生活も極度に逼迫しており、芋・牛蒡・大根といった野菜類も簡単には入手できない状態の中で、乏しい中からのご供養であつてみれば、「切利天の甘露」として味わうことができなかつたにちがいない。

また、「一切の事は国により、時による事」としたのも、いかにも「弘安の役」の後だけに、「国」と「時」を重くみていたことがわかる。仏法とはこうした道理をわきまえることだとする点にも、この頃の聖人における考え方の一端を窺うことができよう。道理をわきまえるとは、一つには仏法の道理、二には世法の道理であるが、仏法の道理が正しければ、世法の道理もまた正常さを保つことになるという立場が、聖人の基本的立場であつたのである。尚、このお礼状は『上野殿御返事』として、本満寺本の写本が伝わっている。

また九月には「俗日常」に授与された曼茶羅と、「俗守常」あてのもの、計二幅が遺されている。⁽¹¹⁾ 日常授与の曼茶羅は、山梨県休息の立正寺に保存されているが、二幅とも筆勢は力強く、病身はいささかも感じられない。曼茶羅の上からみると、聖人は最後まで力を入れて書写されており、現存する弘安五年六月の最後の御本尊まで、筆法は調べて力が入り、精神をこめて記された跡が判然としている。日常・守常といった人がどのような信徒であったか明確ではないが、この頃の数少ない曼茶羅が授与されている点から考え、かなりの信交があり、篤信の徒であったことがわかる。

二、弘安四年の秋（十月）

十月に入ると聖人の病状は、また重くなられ、書簡による返事を記すのにも、時として耐え難い状態であった。十四日付の富木入道からの書状は十七日に西谷へ到着した。さらに「後の七月十五日」の御消息については、同じく二十日頃に到着していたが、「老病」のため食欲もほとんどない状態だったので、返信が書けなかった。『富城入道殿御返事』によれば、「其外雖^レ賜^レ度^レ貴札^レ、為^レ老病之上又^レ不^レ食氣候未^レ奉^レ返報^レ、候条其恐^レ不^レ少候^レ」とあるので、この頃の健康状態が、極めて不調であったことがわかる。

この御書の真蹟については、中山蔵となっているが、『昭和定本』では、「但門下代筆？」と疑問を提示したかたちになっている。また浅井要麟教授は中山蔵の原書について、稲田海素師の説と同じく真蹟ではない事を明らかにしている。⁽¹³⁾ さらにこの御書は蒙古の大軍が来襲して、国難にあった時、大暴風雨によって敵船が沈没して、国難からまぬがれたのは、真言宗諸師の祈禱調伏によるものであるとする説が、鎌倉に流れたので、富木氏がこの説を西谷へ伝

えて来たのに対し、承久の乱の先例を挙げて、謗法の徒が行う修法では、真の成就はありえないことを明らかにしている。したがって『本満寺御書』では、本書のことを「承久合戦之間事」とあり、『日誦目錄』では「報富木氏書」として別に「承久消息」となっている。また『本満寺本』では「十月廿二日」の日付が入っている。本書については偽撰とする説もあるが、浅井要麟師の説の如く、「考証は当否相半ばしている」ものであって、一概に決することはむずかしいといえる。

冒頭の「今月十四日御札同十七日到来。又去後七月十五日御消息同二十比到来」という記述は、真实性に富むものであり、「賜三度度費札」という事実は、実際に受取った人でなくてはわからぬことであるといえよう。全く後人によって偽作されたものとは考えがたい。恐らくは『定本遺文』が指摘しているように、そば近くに侍していた弟子のだけかが、聖人に代って筆を執ったものか、或いは口述筆記したものともいえよう。「仍忍病一端是を申候はん。」という病状から推して、師の口述を弟子が筆記したと考えることも充分できうることであろう。

此の御書から考えられることは、富木氏がしばしば西谷へ書を送り、聖人の安否を心配されると同時に、なにくれと外護の丹精がおこなわれていたようである。

末文近くに「又必しいち（推地）の四郎が事は承候畢」とあって、推地四郎が登場してくる。この人は鎌倉在位の武士であったといわれているが、詳しい事は伝わっていない。ただ『宗祖御遷化記録』によると、「御菲送次第」の中に、後陣の弁阿闍梨のもとで、兵衛志の次に「御腹巻 推地四郎」と記されている。従って晩年の聖人に使え、教化に浴していた篤信の徒であったことがわかる。

また、齢六十に及んでいるので、天台大師の御報恩講を催すつもりであるが、「みぐるしげに候房をひきつくろい

候ときに、さくれう（作料）におろして候なり。」とあるので、大師講までには草庵を改修する予定であったことが知れる。「みぐるしげに」なったというのであるから、建治三年の冬に十二の柱が傾き、壁の落ちたあと、一旦は修復したものの、人夫もなく学生たちによって応急処置がとられた草庵は、いよいよ住むに支障をきたす状態となったため、大勢の門下を集めて大師講を修するには、どうしてもみぐるしげなる草庵では不可能であったのである。

この御書からもわかるように、聖人が朽ち果た草庵を大改修するための目的は、自身のためではなく、六十歳の還暦を迎えた記念に、大師講を営み報恩の誠を捧げるため、多くの門下を一室に会させる必要からであったといえよう。富木氏からの錢四貫もその折りの建築費用に当てるつもりであると述べ、「一閻浮提第一の法華堂造り」と靈山浄土に御参候はん時は申あげさせ給べし。」という文で結ばれている。故に端なる草庵の改修ではなく、今度は「一閻浮提第一の法華堂」を建立するつもりであったことが推察できる。「第一」というのは、伽藍規模だけを意味するものではなく、第一の経王たる法華経の殿堂を建立するものであるという、深い意味がこめられていたものであると考えられるのである。ともかく聖人はこの頃、法華堂の建立を決意しておられたことがわかる。

これは一か月のちの十一月に、草庵の大改修がおこなわれ、妙法華院久遠寺が建立されるに至り、現実化することになるのであるが、今は富木入道から寄せられた「錢四貫」をもって、その費用の一部にあてることを記しおかれているに留まっているのである。

さて十月も下旬に入った二十七日に、同じく富木氏宛の一書『越州嫡男並妻尼事』と名付けられた一紙十一行の真蹟がある。「九月九日写鳥、同十月廿七日飛来仕候了」とあるので、返信であることがわかる。越後守時盛の次子である時光が妻尼らと謀反を企てた疑により、異島流罪に処せられたことをあげ、「過分事歎」と指摘している。この

時光は聖人に対して弾圧を加えた武蔵守宣時の従兄に当る人である。また四条三郎左衛門尉の書簡についてもふれており、さらに「伊与殿事、存外性情智者也。当時学問無隙」と記している。伊与殿とは、富木氏の義子であるといわれており、秀れた智者として、習学に専念していたもののごとくである。文面から受ける感じでは、当時、伊与房は西谷にあって、聖人のもとで習学にいそんでいたことが推察できよう。病身の聖人に仕えつつ学問の道に精進していた様子がわかるようである。断片一紙のため詳しい内容はわからないが、この頃、各地の弟子や信徒らから、さまざまな情報を知らせる書信が、西谷へ飛来していたであろうことが推察されてくる。

聖人はいつも各地の門下から、国内における政治や社会の動き等に関する情報を、集取して、適切な判断を下し、門下への指示を流していたようである。身は西谷の草庵に在っても、当時としては早い情報の入手ができていたように感じられる。例えば、先きの他国侵逼の難についても、いち早くニュースを知ることができる態勢を持っていたのである。門下の主要な人々が、常に聖人の情報網として、活躍していたことが推察できよう。

時光流罪のニュースも、当時としてはなかなか伝りにくい甲斐の山奥に、飛来していったのであった。聖人はこうした情報を早く察知することにより、各地に散在する門下に対して、時宜をえた指導や教化を与え、門下の充実に資したものと考えられるのである。こうした点からみても、身延時代の聖人の生活は、端なる隠居生活ではなかったことが首肯できよう。

たしかに入山の直後は、一種の敗北感に似た感慨を持ち、流浪の旅にのぼるつもりも一分あったように受け取れる面もあるが、それは一時の心理的に複雑な一コマを表したものであって、それがただちに聖人の心的内面のすべてをしめていたという事はできないであろう。

さて晩年のこの頃に至ると、病身であったことも加わり、筆を手にすることが、従来のようなわけに行かぬことも多く、曼茶羅の授与についても、たやすく記すことは、次第にむずかしくなってきたようである。したがってこの時期に、御書や曼茶羅の授与者は聖人との関係が、よほど密接な者であったろうとも考えられる。十月には、次の四幅の曼茶羅が図顕され、それぞれ門下に授与されている。即ち、一つは千葉市の随喜文庫に保存されている御本尊で、授与者は削損され不明である。二幅目は俗守綱授与で、京都本法寺の所蔵である。三幅目は俗真永に授与したもので、高知市要法寺の所蔵である。四幅目は俗近吉へ与えたもので京都本能寺の蔵である。四幅共一紙で、四菩薩の表現等に、やや従来の筆勢と異りを感じるのは、病状を押しての執筆であることを看取することができる。

三、堂宇の造営

ところで、西谷では草庵がいよいよいたみがひどくなり、壁や柱、それに屋根も雨漏りが大きくなり、このままでは常住している聖人はもとより、集ってきて聞法しようとする僧俗に至るまで、支障をきたすことになったので、地元の波木井氏を始め、門弟らの進言により、草庵を改修して、規模も大きなものにしようとする動きがみえはじめたのである。

十月に入ると、その相談は急テンポで進展した。先きの富木氏からの「銭四貫」も、その費用に当てられることになったが、十一月の十五日には上野尼御前から、白米一駄と、洗芋一俵が送られてきた。西谷では普請も一段落している頃であった。その礼状が記されているが、末尾の一紙のみ真蹟現存で、京都本禅寺にある。⁽²²⁾この尼御前は周知の通り、南条時光の母尼のことであり、「抑御消息を見候へば、尼御前の慈父故松野六郎左衛門入道殿の忌日と云云」⁽²³⁾

とあるので、尼御前が父の命日に供養として届けられた次第がわかる。松野氏については、すでに明らかな通り、駿河国松野の邑主で、聖人には古くからの外護者の一人であった。

「妙法蓮華經と申は蓮に譬^られて候」という文で始る一文には、「蓮華」の説明が詳しくされており、①前華後菓、②前菓後華、③一華多菓、④多華一菓、⑤無華有菓、等と花の種類を挙げ、蓮華は他の花と異り、華菓同時であるとして、因果同時に当るものと解しているのである。即ち、「法華經と申は手に取^らげ其手やがて仏に成り、口に唱ふれば其口即仏也」という因行果徳の同時性を主張している。また唐の祥公によって記された『法華經伝記』に出てくる烏龍と、その子遺龍の物語を引用し、法華經によって「必仏になる」ことを明らかにしている。こうした物語は法華經の靈驗を現したものととして、中国の物語や史伝と共に、聖人は御書の随所に引用されている。当時渡っていた唐・天竺の文書について、仏典はもちろん、博く各分野にわたって被見されていたことがわかる。

末文には、「此由をはわきどのよみきかせまいらせ給^べし。事そうそうにてくわしく申^ず候^{（24）}。」となっているので、伯耆房日興が富士方面一帯の教化活動については、重要な位置にあり、常に門下の動靜についても、気を配っていたことがわかる。いわば富士地方における布教第一線の責任者といった立場であったろう。日興に限らず六老僧を中心とする直弟子の門下は、それぞれの地において、西谷からの指示に従いつつ、聖人の手足となり、教化活動や情報連絡等に、大きな役割を果していたといえる。聖人が身延へ入山されてからは、ますますこの傾向が強くなり、伝道の出先機関としての役割を果す結果ともなっていたとみることができよう。^{（25）}

先きにもふれた通り、十一月はいよいよ草庵の大改築が始められ、従来の草庵から一新して、大坊・小坊それに馬舎を持つ寺院としての建造物が、初めて完成し落慶式の行事が、盛大におこなわれたのであった。廿五日付で領主の

南部六郎に宛た『地引御書』によると、この時の坊の大きさは十間四面に庇を造り加えたものであったことがわかる。坊の敷地には山を切り開いて整地し、拡張工事も行い、十月から二十四日間もついやして、用地の準備が調えられたのであった。この間、不思議にも雨が全くなく、工事は順調に進展していった。かくして、

「十一月ついたちの日、小坊つくり、馬やつくる。八日大坊の柱だて、九日十日葺候了。しかるに七日大雨、八日九日十日はくもりて、しかもあたたかなる事、春の終のごとし。十一日より十四日まで大雨ふり、大雪下て、今に里にきへず。山は一丈二丈雪こほりて、かたき事かねのごとし。」²⁶⁾

と記されているように、先ず小坊と馬舎が、一日に造られ、七日には浄めの大雨があつて、八日に大坊の柱建てがあり、九・十の両日で屋根が葺き終つたのであつた。しかもこの日は暖かな日和で、建築日和ともいうべきものであつたのである。

こうして諸堂の建築が終るのを待ち構えていたように、十一日からは地固めの大雨が、大雪にかわり、凍つて固いことは金属のようであつたというのである。まさに諸天善神のご守護によるものといふことができよう。

そこで二十四日に落慶式を挙行することになつたのであるが、前日の二十三日からは、再び天候に恵まれ、「そら晴て、さむからず。人のまいる事、洛中かまくらの町の申酉の時のごとし。さだめて子細あるべきか。」という状態であつた。二十三日は開堂供養のための準備で、山内はいつになく活気を見せ、各地から馳せ参じた弟子や信徒らによつて、賑やかに仕度が調えられるに至つた。

当日の二十四日は、遠近からの参詣者が多数集い、ちよつと京都や鎌倉の町中で、最も人通りの多い夕方四時から五時頃にかけての賑わいようであつたという。諸天の加護がなければ考えられないような順調さと天候に恵まれた落

慶式であったことがわかる。身延山久遠寺創建にふさわしい日々であったといえよう。かくして従来の住み馴れてきた草庵は、ここに本格的な堂宇をもった建築として、生れ変わったのである。

四、身延山久遠寺妙法華院

ところで『高祖年譜』によれば、この時の建物をもって「久遠寺落慶」とし、「縦横六丈、山号^ニ身延^ニ寺^ニ扁^ニ久遠^ニ、十一月二十四日修^シ大師講^ヲ落慶^ス、遠近群集^ス」⁽²⁷⁾とあり、「身延山久遠寺」の号が、ここで付けられたことになっている。ただし、『仏祖統紀』では文永十一年六月十七日に、聖人が西谷の草庵へ入られた時点で、「高祖扁呼^シ身延山久遠寺^ニ」⁽²⁸⁾という説を立てている。『本化別頭高祖伝』でも入山の当初に、「扁呼^シ身延山久遠寺^ニ」⁽²⁹⁾とし、『身延鑑』にも文永十一年の「六月十七日に庵室をむすび身延山久遠寺妙法花院と号し、天竺靈鷲山をうつし⁽³⁰⁾」⁽³⁰⁾となつているため、『年譜攷異』では此の点を「不審⁽³¹⁾」であると指摘している。

聖人自身は、この点についての明確な記述をしていないため、さだかではないが、「身延山」の号は、入山の初期より用いられている。例えば、入山の翌年文永十二年二月十六日の『新尼御前御返事』には、「此所をば身延の嶽と申⁽³²⁾」⁽³²⁾とあり、「身延の嶽」とも称している。したがって「身延山」という山号は当然考えられてくるが、「久遠寺」とか「妙法華院」という寺号・院号については、いつ頃から称せられたものか、確定的なことはいえないことになる。『身延山史』によると、「養夫を身延と替へ玉へるは入山早々にして、文永十二年二月十六日の御消息に、此所をば身延の嶽と申すとあるに徴して明なり⁽³³⁾。」⁽³³⁾とあり、元来「養夫」であったものを「身延」と改められたことになっている。しかし、久遠寺と称したとは記されていない。これは弘安四年に「従来の草庵を改築して十間四面の伽藍を造

營す。時に聖祖方めて身延山久遠寺妙法華院と扁せらる。即ち一度此山に詣づる輩は、罪障消滅して己身の壽命を延長し、久遠本果を光顯する。事の寂光土を表示せるものなり。」⁽³⁴⁾とあって、弘安四年の堂宇造營を機に「久遠寺妙法華院」と称したことを明らかにしている。つまり『年譜』説を採用しているわけである。

そこで、この兩説のいずれを採るか、という問題になるが、先ず祖書に出てくる「身延山」は、いわゆる山号寺号としての「身延山」というよりは、四山四河の中の一つとして数えられている山の名として使用されていることは、御書に當ててみて了解できるところである。また「久遠寺妙法華院」という寺号院号は、御書にその名を見ることができないとしたら、恐らくは聖人が、身近かに使えている人々に対して口にはされてきたものの、御書に記すという段階にまでは至っていなかったのではないかと推察しうる。

ここで私見を加えてみるならば、①入山の当初は、すでに明らかなく「いまださだまらずといえども、大旨はこの山中心に叶て候へば、しばらくは候はんずらむ。結句は一人になって日本国に流浪すべき身にて候」とあるように、この山に根拠地を置いて永住するという考えは、まだ定っていなかったようである。②その上、「今年の飢渴に、はじめたる山中に、木のもとに、このはうちしきたるやうなるすみか、をもひやらせ給。」⁽³⁵⁾という住居であった。恐らく南部六郎にしてみると、急に決った入山とはいえず、しっかりした堂宇を建立して聖人を迎えようと考えたにちがいない。ところが聖人は当時の一般的な例にならない、質素な草庵での生活を望まれたため、身の廻りの世話をする弟子一人と共に、文字通り雨・露をしのぐだけの庵室となっていたものであろう。木の元に、木葉を敷きつめたような草の庵は、「身延山久遠寺妙法華院」といったものものしい伽藍を用意したものではなく、わずかに十二の柱からなる庵室であったのである。③聖人は最初から山号寺院号をもった大寺院を望まれていたのではなく、あくまで山

林にまじわりつつ、後半の人生でやっておかなくてはならない、幾つかの仕事を進めて行くつもりであったろう。④聖人にとって最初からの大寺院は、必要としなかったのであった。もしも、入山の当初に久遠寺妙法華院といった立派な名称をつけていたとしたら、在山九年間の御書中に、少なくとも何回かその寺院名が記しおかれていて当然といえる。⑤しかるに、現存の御書中には久遠寺・妙法華院という名称は見当らない。という事は、聖人在山当時は専ら「草庵」で通っていたのではないかとも考えられる。事実「木の元に木葉うちしきたる」栖では、山号寺院号を必要とする段階にまで至っていなかったからであろう。⑥「一人になって日本国に流浪すべき身」であつてみれば、大寺院を構える必然性もとほしいものであったといえる。⑦また前にもふれた通り、当時は鴨長明が日野山の草庵で、一丈四方の庵室に籠り、ひたすら『方丈記』を著したように、「草庵仏教」と称されるような風潮にあったので、聖人もこうした例に習ったものとみなしうる点もあろう。

以上の諸点から再往検討してみると、弘安四年の大改修で、大小の坊や馬舎をもった堂宇の造営を機に、従来の草庵から、身延山久遠寺妙法華院という称号を持つようになったものとも考えられうる。したがって、先きの『高祖年譜』の説は、一応妥当なものといえることができる。ただし、『地引御書』を見ると、この時の造営の様子や、落慶式の模様が、詳しく目を追って記されている。もし仮りにこの時、聖人によって、かかる山号寺院号の命名が正式にあったとしたら、恐らくこの御書の中に、そのことをふれておられるのが当然といえる。天候から人出の様子に至るまで詳述されているのであるから、山号寺院号の命名があったとしたら、この点を表記しないということは、常識的に考えてもありえないことといえよう。もしこの仮説が許されるとしたら、「身延山久遠寺妙法華院」の名称は、きつと聖人が口にはされていたものの、正式に書き表すことはされていなかったのではないか、後人の歴代がその意

を帯して「身延山久遠寺妙法華院」と名づけ、弘安四年の大改修の時、聖人によって名づけられたものと伝えるに至ったのではないか、と推察することができよう。

さて、十一月二十四日は「大師講³⁷並延年、心のごとくつかまつりて、二十四日の戌亥の時、御所に集会して、三十余人をもつて一日経書きまいらせ、並申西の刻に御供養すこしも事ゆへなし³⁷。」と開堂落慶の諸行事が、とどこりりなく進められた様子を記している。西谷では天台大師講が、その命日に営まれていたようであり、その日を選んでの開堂式ということになる。大師講を重視していた一つの証左ともいえよう。また延年の舞いは、天下泰平国土安穩を祈って修せられた嘉齡延年の舞のことであるといわれ、平安末期から寺院で、法会の後、余興的に僧侶によって演じられた芸能で、舞楽・田楽・猿楽などを含むものであるといわれている³⁸。例えば『吾妻鏡』によると、建久五年三月十五日の項に、頼朝が若宮別当の坊において、舞曲を覽た時、「僧徒延年に及ぶ³⁸」と記されているごとくである。身延ではこれを機に、毎年延年の舞が演じられるに至ったが、現今では伝わっていない。『啓蒙』では「今ハ十月十二日待夜ニ行⁴⁰之矣」とあるので、一時は御会式の建夜に演じられていたことがわかる。次に一日経であるが、一日の中に法華経を書写することをいうのであって、この日は朝の八時頃から三十余名で、夜半の三時頃までかかって、無事に堂供養の儀を済ませたという。

次に『地引御書』では、堂宇造営の任に当った人々に対する労をねぎらい、働きぶりについても記している。それによると南部六郎の一門で、子息の次郎を始めとする公達が、親の言い付けもあつたとはいへ、我が心から進んで工事に当り、「われと地をひき、柱をたて、藤兵衛・右馬の入道・三郎兵衛尉等已下の人々、一人も疎略の義なし⁴¹。」というから端なる役目として行なつたのではなく、心をこめての普請であり、疎略に思ふ者は一人もいなかったとい

身延山晩年の日蓮聖人（上田）

う点だけを見ても、いかに南部一門の人々による誠意が深いものであったかが窺えよう。とかく南部一門と聖人との関係について、平素疎略の感なきにしもあらずといった一念をいだかせる向きもあるが、この造営について試してみてもわかるように、身延山における外護は、篤いものであったことがわかる。

「坊はかまくらにては一十貫にても大事とこそ申候へ。」というから、完成した大小の坊舎は立派な建造であったことがわかる。身延山久遠寺妙法華院と称するにふさわしい容相であつたらう。

ところで、南部六郎は今回の造営に当り、一つの祈願を持ち、その所願の成就を願つての供養も兼ねたものであつたようである。『啓蒙』では「南部殿別ニ立願有テ堂供養ノ次テヲ以テ執行レント見ヘタリ、堂建立モ定テ南部殿檀頭ナルヘシ」とみなしている。

かくして、西谷では堂宇の造営も完成し、盛大な中にも荘かに落慶式を済ませたのであるが、聖人の健康は門下の安否を気づかう中で、次第に悪化し「老病の上、不食気いまだ心よからざる」状態が続くなかで、弘安四年の暮が迫つて来た。三島の左衛門次郎に法門を記した御書を送るのにもやつの思いであつたようである。

〔註〕

- (1) 南条兵衛七郎殿御返事 定遣 一八八三頁
- (2) 『仏祖統紀』 二四一—一八
- (3) 『御遺文講義』 一四一—
- (4) 南条兵衛七郎殿御返事 定遣 一八八四頁
- (5) 同 一八八四頁
- (6) 富木殿御書 定遣 八〇九頁

- (7) 鈴木一成教授は「身延山御書系年考」(大崎学報第一一〇号)の中で、身延靈山思想の展開を根拠としながら、『身延山御書』をもって、そのピークとしている。(一四頁)
- (8) 上野殿御返事 定遣 一八八五頁
- (9) 同 同 一八八五頁
- (10) 立正安国論 同 二〇九頁
- (11) 『日蓮聖人真蹟集成』第一〇卷一〇〇〜一二頁
- (12) 富木入道殿御返事 定遣 一八八六頁
- (13) 『日蓮聖人遺文全集』別卷 三四五頁
- (14) 本満寺御書 録外一三一〜二六
- (15) 日諦目録 定遣三一二八二頁
- (16) 荒木勇「承久書の真偽如何」(「法華」四卷九号六〇頁)では、七項目にわたって、偽説を立てている。
- (17) 富城入道殿御返事 定遣 一八八八頁
- (18) 『宗学全書』 二一〇四
- (19) 富城入道殿御返事 定遣 一八八八頁
- (20) 庵室修復書 同 一四二頁
- (21) 越州嫡男並妻尼事 同 一四八九頁
- (22) 対照録では弘安三年と見ている。
- (23) 上野尼御前御返事 定遣 一八九〇頁
- (24) 同 同 一八九四頁
- (25) 聖人滅後六老門家を中心に、各地の布教活動は活潑化するが、すでに在世中から、こうした動きは盛んであり、西谷からの指示も又しばしばであったようである。
- (26) 地引御書 定遣 一八九四頁
- (27) 『高祖年譜』 四八頁
- (28) 『仏祖統紀』 七一六頁

身延山晩年の日蓮聖人(上田)

身延山晩年の日蓮聖人(上田)

- | | | |
|------|-----------|----------|
| (29) | 『本化別頭高祖伝』 | 下巻一二頁 |
| (30) | 『身延鑑』 | 一二 |
| (31) | 『年譜攷異』 | 下一四四 |
| (32) | 新尼御前御返事 | 八六四頁 |
| (33) | 『身延山史』 | 一二 |
| (34) | 同 | 二〇 |
| (35) | 宮木殿御書 | 定遺 八〇九頁 |
| (36) | 上野殿御返事 | 同 八一九頁 |
| (37) | 地引御書 | 同 一八九四頁 |
| (38) | 『全訳吾妻鏡』 | 別巻 二三頁 |
| (39) | 同 | 二巻 二九八頁 |
| (40) | 『録内啓蒙』 | 三六一—三三九 |
| (41) | 地引御書 | 定遺 一八九五頁 |
| (42) | 『録内啓蒙』 | 三六一—三三九 |
| (43) | 老病御書 | 定遺 一八九六頁 |